Japan Society of Obstetrics and Gynecology

P－39 閉経前後におけるインヒビン測定の意義

横浜市大
白須和裕、橋本栄、菊地律子、植村次雄、水口弘司

［目的］閉経期周辺における血中インヒビン動態について検討し、あわせてＦＳＨ、エストラジオール（Ｅ２）の変化との関連からその意義につい考察する。［方法］４１～６０歳の婦人１２１名を対象に血中インヒビン、ＦＳＨ、Ｅ２をＲＩＡにて測定した。インヒビン測定にはウシインヒビンを^{125}Ｉで標識、ウサギ抗インヒビン抗体を第１抗体としたＲＩＡキットを用いた。また、閉経の有無、閉経後年数についても調査した。［成績］①血中インヒビンは加齢とともに減少し、有意な負の相関を示した（r=-0.467, p<0.001 ）。年齢層別にみたインヒビン値の検討では、４６－４７歳群4.00±1.03IU/ml (M±S.E.）から４８－４９歳群1.85±0.88へと減少し、さらに５０－５１歳群1.47±0.59から５２－５３歳群0.23±0.14への段階で急激な減少を示した。また、閉経前のグループにおけるインヒビン値3.18±0.56と比較すると閉経後グループ（平均閉経年齢４９．１歳）では0.54±0.14と有意に減少していた(p<0.001) 。しかし、閉経後年数別にインヒビン値をみると、各群間に有意差はなかった。②ＦＳＨは、加齢とともに上昇し、有意な相関が認められた（r=0.476,p<0,001)。４６－４７歳群19.2±5.9mIU/ml(M±S.E.）から４８－４９歳群55.1±18.6に急激に上昇し、以後漸増した。③ＦＳＨとインヒビンとの間には、有意な逆相関関係が認められ(r=-0.476,p<0.001)またＦＳＨとＥ２との間にも有意な逆相関関係が認められた（r=-0.430,p<0.001) 。｛結論｝インヒビンは閉経前および閉経後早期に減少することから閉経前後の残存卵胞の状態を反映し、閉経予知の指標となり得る可能性が示唆された。

P－40 閉経婦人の体脂肪分布と脂質代謝の関連性に関する検討

鹿児島市医師会立病院
伊集院博文，大西英資，住吉　稔

［目的］中高年女性の高脂血症は肥満や閉経という観点から論じられてきた。しかし，脂質代謝は肥満度より体脂肪の分布と相関し，閉経を境に体型（体脂肪分布）も変化する。そこで以下のような検討を行った。［方法］閉経婦人80例(61.6 ±7.3 歳，高脂血症43例）を対象とした。年齢，閉経後年数，身長，体重,body mass index(BMI) と体脂肪率，上/ 下半身脂肪量比(U/L),上半身脂肪量をDEXAで測定した。①各因子と血清脂質（TG, TC,HDL-C）の相関を求めた。②最も相関した因子を有経婦人(36.7 ±9.3 歳,N＝170)のそれと比較した。次に，腹囲を臍横部と腸骨上部の皮下脂肪厚の和で除した値(内臓脂肪相対量;W/SFT) をCTあるいはMRI から求め,W/SFT×上半身脂肪量×定数(内臓脂肪絶対量;V) を算定した。③W/SFT, Vと血清脂質との相関を求めた。④V,W/SFTと各因子との相関を求めた。相関は年齢，閉経後年数，身長を補正した多変量解析で行った。［成績］①U/L がTG,TC 値と最も相関した(それぞれr ＝0.34* ,0.32 * ）。②閉経婦人のU/L は1.3 ±0.4であり有経婦人の0.9 ±0.4 に比較して有意に高かった* 。③VはTGと正の相関を示し，特に肥満者で強い相関(r＝0.72*) を認めた。W/SFT はVほどTGとは相関を示さなかった。TC値も同様の結果であった。④VはU/L と正の相関(r＝0.41*) を示した。しかし，W/SFT は肥満者においてのみU/L と相関を示した。(* P <0.01)［結論］閉経を境に体脂肪分布は上半身型に傾き，特に内臓に脂肪が蓄積しやすくなる。内臓脂肪絶対量が脂質代謝と最も相関することから，閉経婦人は体脂肪の分布の点からも高脂血症になりやすいことが示された。

NII-Electronic Library Service